

研究講座

機能する総義歯作りのコンセプト①

～初期設定から機能回復まで～

兵庫県姫路市開業
三木 逸郎

第1回「問題点の把握」

本年7月に生涯研修で講演した内容を踏まえ、3回に分けて連載する。

第1回目は、顔貌や口腔内所見などから義歯の「問題点の把握」について述べる。

以降、第2回「判定基準をもった製作法」、第3回「装着後の変化とその対応」と続く。

主訴と診査の関連づけ

まず、使用中の義歯のどこに問題があるのかを把握することが重要。主訴と口腔内外の診査をしながら情報を得て関連づけて考える。痛みの原因が粘膜面なのか咬合かの診断がつかぬまま、闇雲に痛い所を削除して、咬合紙の当たりを取っていてもなかなか解決にはつながらない。

顔貌・旧義歯からの情報

使用中の義歯を入れたまま顔貌の観察をしてみる。上下口唇の厚みから咬合高径の適否がわかり、鼻唇溝の深さからは水平的顎位のズレがわかる。注意深く観察すると、会話の時に口唇の接触度合、また唾液を嚥下する時のオトガイ部の過緊張などからも高径不足が読み取れる。

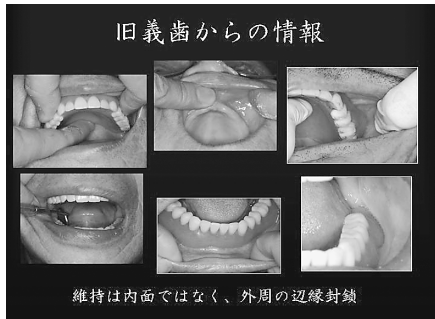
図1



安定しない義歯では、無理な力が入るため不自然な表情になる。

次に義歯を外して上下顎の対向関係を見ると、その人の咬合の変遷が推測される。それと同時に口腔内では顎堤粘膜の厚みや骨鋭縁部など受圧部の触診を行う。再度義歯を入れながら、床縁に沿って筋の付着部や粘膜の緊張度(たるみ、反発力)を診査する。その上で床外形・研磨面の過不足から改造部をイメージする。

図2



模型からの情報

歯槽骨の吸収形態により、旧義歯が顎堤にどのような方向から負荷していたのか推測できる。多くは咬合高径不足や平面が後ろ下がりなど、咬合平面設定時の不備が、歯槽骨の吸収の原因と考えられる。

これらの下顎位を補正していくと、下顎の臼後パッドの封鎖が可能になり、一段と吸着力がアップし、義歯形態もゴールに近づく。

図3

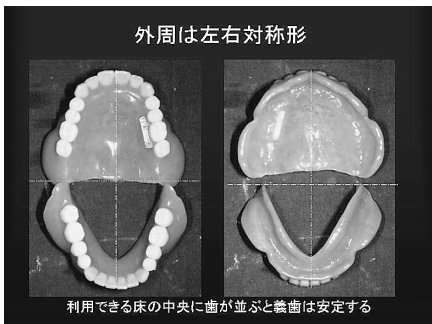


下顎位を適正に設定することにより、更なる歯槽骨の吸収を軽減させることができる。

機能にマッチした形態をイメージする

口腔機能が正常であれば、総義歯には咬合平衡と筋平衡のバランスがとれた、ある一定の基本形態がある。外周はほぼ左右対称形になっている。

図4



骨格パターンが正常咬合であれば、咬合平面の上下的位置付けは、ほぼ中央にあり、上下の床の後縁はほぼ一致する。周囲粘膜で覆われた総義歯の床縁は丸く、厚みのある形態になる。ただし、上顎後縁部や下顎臼後隆起部は粘膜ヒダがないために、シャープな辺縁になる。上唇小帯部は上下的に動かされるのでI字形に表現される。

頬小帯部は口輪筋が作用すると前方に、頬筋が作用すると後方へ移動するが、活動量は頬筋の方が大きいために遠心側に長いV字形になる。

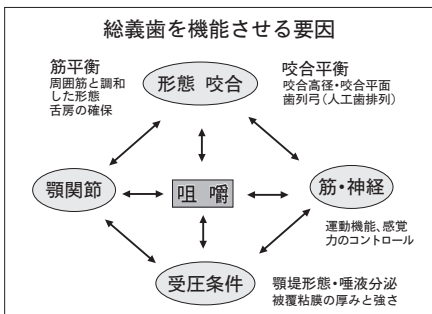
図5



このように基本形態がイメージできるようになると、義歯の形態を観るだけで、その問題点と改造すべき点が即座に判読できるようになる。

総義歯を機能させる要因

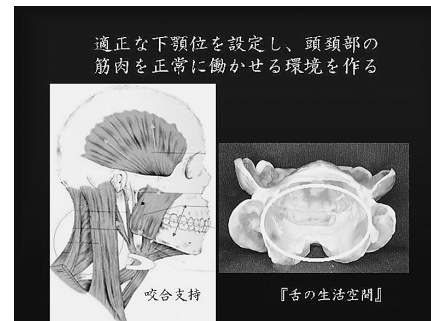
図6



機能と義歯形態は表裏一体で、まず正常機能を引き出す適正顎位を決める。下顎位が決まればはじめて、デンチャースペースの確保が可能となる。咬合平衡が筋平衡を導いていく。それ故、咬合が悪ければ筋圧中立帯で製作した義歯の形態は整わない。始めに術者が与えた咬合高径や前後的・水平的咬合平面などの初期設定が悪いと、機能回復どころか組織にダメージを与えることもある。適正な咬合高径と舌運動を邪魔しない

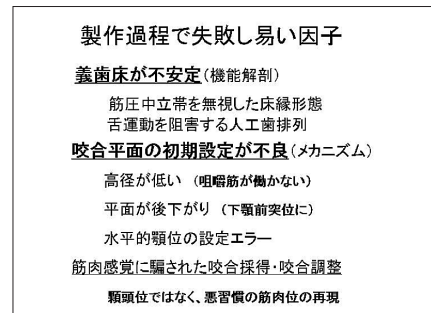
人工歯排列ができると、顎関節周囲の筋や腱のストレスが解放されて守られるのである。

図7



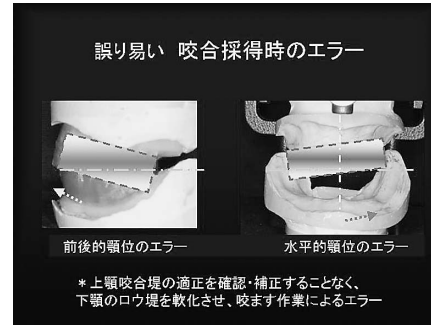
製作過程で失敗し易い因子

図8



義歯床が動いていると正しい咬合採得は不可能である。上は落ちない、下が浮かない、周囲粘膜で吸着した咬合床の提供が不可欠となる。上顎の咬合堤で適正な咬合平面の設定を確認しないまま、悪習慣の筋肉位で噛ませて下顎のロウ堤を軟化すると、義歯床が動く原因となり、後々問題を引き起こすことになる。

図9



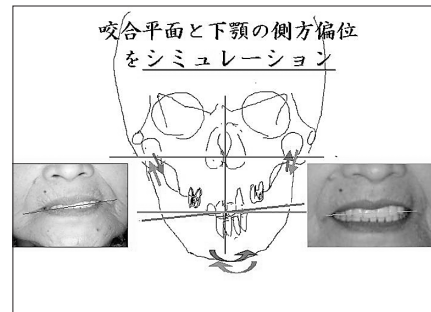
基盤となる印象採得、顎頭安定位での咬合採得、舌運動を邪魔しない人工歯排列のポイントになる。

治療用義歯の必要性

ダメージを受けた顎関節と筋、粘膜などを機能回復させるには、いきなり完成義歯は困難であり、その前に治療用の義歯が必要となる。

- 1) 咬合関係に問題がないが、粘膜面に問題がある場合
 - 2) 歯槽骨吸収に伴い義歯床が不適合で、しかも咬合に問題がある場合
 - 3) 咬合崩壊による筋・顎関節の機能異常
- すべての悪習慣をキャンセルして適正なメカニズム(咬合)を設定し、新たにスタートさせておき、その後の患者さんの変化に対応して組織・器官をリモデリング(再成形)させる必要がある。

図10



治療用義歯で機能改善を図る期間に、患者さんとの対話から信頼関係を築いていくことも、良い義歯をつくるための秘訣かもしれない。

(つづく)